

人間の仕事

梶原 敬一

はじめに

おはようございます。紹介していただいた梶原と言います。講題を「人間の仕事」としました。僕の仕事は医者でありまして、子どもの病気を見ている小児科の医者をしております。私の仕事というと、普通はそれで済むのですが、皆さんと一緒に考えていただきたい仕事というのは私たちが考えているものと、人間としてなさねばならないものということが、同じものであるかどうかです。皆さんも卒業されて、仕事に就かれたり、結婚されて子育てをされたりするわけですが、それらが賃金を得ると

か、得ないとかにかかわらず、大事な仕事だろうと思います。そういう仕事を通して皆さん一生、生きていかれる。そういう仕事が一段落ついた時、定年がありますね、働く人であれば。子育てであれば子どもが大きくなって家を出ていく。残された時間がどういう意味を持っているかを考えていただきたい。皆さんは若いですから人生には長い時間が残されているとお思いでしょうが、その時間がどのような形で自分の人生に意味を与えるかということを考えていただきたいと思ってお話をすることにしました。

二種類の仕事

仕事というのは働いて稼ぐ、家の仕事をして生活することが大きな目的だろうと思います。生活していくという仕事と同時に、何かをやり遂げる、自分がそこに仕事を通して一つのことをつくりあげること、仕事を持つている大きな意味だろうと思います。皆さんが仕事を通して、一〇年、二〇年、働くことでなくてもいいですが、自分

人間の仕事

がやりたいことを通して何かをつくりあげていく。つくりあげることにおいて自分の人生を証明していくことがもう一つの仕事だと思います。これが普通に言う仕事の二つの面です。

ところが小児科の医者をしておりますと、病気で早く死んでしまう子どももいますし、大きくなつて自分でやりたいことができないで亡くなつてしまう場合もあります。病気でしたいことが中途でできなくなつてしまう人たちもいます。そういう人たちを見てみると、自分のしたいことをする、仕事をする事だけが仕事だろうかと思えた時、どういう形であつても、どんなふうにも人生が終わろうと、病気になるうとも、そこでなさねばならないもう一つ、人間にとって大事な仕事があるように思えてきたからにはかなりません。人間にとって大事な仕事というのは、自分が何かをする、何かをつくるということではなく、人間としてなさねばならないことがある。人間としてつくりあげておかなければならないことがあるということ、医者になつて二〇年あまりの時間を通して感じるようになってきたからです。そのことは世間的には生きている間に立派な仕事を遂げて、業績を上げて、立派に子どもを育てあげて終わりかも

しませんが、自分の人生を振り返った時、自分は何をしてきたのかということになった時、どんなに立派な仕事をしてこようと、どんなに自分で理想的な家庭を築いてこようと、その時に自分自身に残されたものは何か。自分が働いて、仕事をして、自分に何が残ったのかを考えざるをえないということに気づかれると思うんです。それは人が死んでいく時に、自分が生きた証拠として持つていくことができるものがあるかどうかということです。

人間としての死

―何を伝えるか

皆さん、仏教の教えを聞かれておりますから、単に死ぬということが人間が身体が減びることだけではないと聞いてこられたと思いますが、死ぬことによって、死ぬ時に自分が生きたということにおいて、何をもって死んでいけるのかを考えていただけたら、と思います。その時に持つていくものは、まさに人間として生まれてきた、人

人間の仕事

間として行ってきた自分の人生そのものの仕事ではないだろうかと思うんです。自分の人生の中で人間としての仕事を持って私たちは死んでいく。

田中一村という画家がいました。すばらしい絵を描かれています。中央の画壇から遠ざかって、一人で奄美に暮らしてそこで絵を描いて亡くなられた方です。一つの作品に対して、彼は「この絵は誰に売るものでもない、これは閻魔様へのお土産だ」と言っておられます。閻魔様を持っていく土産は自分自身の人生をかけて、人生をかけて仕上げた仕事だということです。死んでいく時に何を持って死んでいけるかどうか。絵を持っていくわけにいかんでしょうが、絵を描いたことにおいて自分の人生において仕事をやり遂げたという、一つの絵に込められた思いですね。僕たちはそういう才能があるわけではありませんが、自分の人生をかけて、死ぬ時にこれだけは持つていけるというものを一生の間をかけてつくりあげていくことも、別の意味で仕事として私たちが日々生活の中でやっていることではないかと思えます。それはいろんな形で仕事をする、毎日の暮らしの中でやっていることが、そのままの形で現れるのではなく、死ぬ時になって初めて全体の意味が見えてくるようなもの、そういう仕事

あろうと思うんです。

それは死ぬ時に持つていくというだけではなく、死ぬ時に次の世代に、死んでいくことを通して次の世代に伝えるものを残すということです。会社を大きくして会社を残すこともできません。財産を残すこともできる。自分の伝記を書いて本を残すこともできるかもしれませんが。それはある人が自分がつくったものを残す。その人が残るわけではない。自分の人生を残していくということは、その人が生きた、全部がそこに込められなければならぬわけです。生まれてきて、様々な体験をして、経験を通して自分自身が自分の人生が終わったということ伝えるようなものでなければ、その人を伝えるということにはならない。会社を残すことはできるでしょう、財産を残すこともできるでしょうけど、でもその人の人生を残すことはできない。その人の人生を残すという形で、私たちが自分の人生を他の人に伝えるということが、死ぬという時に大事な仕事としてあるということを、気づかされてきたと思うんです。それは死んでいく人を見とる時、死んでいく人によって私たちが受け取るもの。皆さん、若いから亡くなる人との経験はないかもしれませんが、亡くなる人との別れにおいて、亡く

人間の仕事

なっていった人から受け取るもの、受け取ったものと同じものを、自分が死んでいく時に次の世代に渡していく。そういう形で人から人へつながっていく、私の仕事ではなく、私という存在を通して、人間としてなしている仕事ではないかと思うんです。

皆さん、どんなに若くても死んでしまいます。僕よりは後に亡くなる方が多いでしょうが、やがては皆、死んでいく時に、自分の人生をかけて伝えていくものを残すことができるかということが、人間の仕事の最も大きなものだろうと思うんです。そうはいっても、こういう生き方をしたから次の世代に残るといえるものではないです。自分の人生がどんなに惨めであろうと、どんなに辛い人生であろうと、そこから伝えられていくものは、幸せな人生において伝えられるものに比べて劣っているものではない。苦勞して一生報われなかったとしてもですよ。伝えられていくものは幸せに過ごした人生に比べて劣ったりするものではない。むしろ苦勞の多い人生の方が伝えるものが多いかもしれない。自分で思うこともできないで早く死んでしまうことによっては、長く生きてそのことによって伝えられるものに比べて、短いものが十分伝えることができるかということではない。長さ、やったことではなく、人生そのものに伝わるも

のは、ある意味では人間として生まれたということ、何をしようが、どのようにしようが、全く同じということが言えるかと思うんです。どのような形であれ、人が死んでいく時に受け取るものはそういうものだからです。

― 一生懸命生きる

それならば人間の仕事ということを取り立てて意識せずに一生懸命生きればよいということになります、それはそれでその通りだと思いますが、そういうことを意識して私たちが仕事ということを考えてみなければならぬと僕が思うようになったのは、そのことを意識するか、しないかによって私自身の今、生きている、今、やっていることが違った意味を持って見いだされることに気づいたからです。人間の仕事をしているという自覚を持って私が日々の生活を送っていくことによって、私の毎日の日常が違ったものになるからです。人間の仕事という意識を持って生きようが、意識を持ってない状態で生きていようが、伝えられるものはあまり変わりがないかもしれませんが、そのことを意識して生きている自分にとっては、自分の人生を全く違ったもの

人間の仕事

にするとということです。

それは伝えるということの仕事と同時に、逆に私たちは今、生きていることにおいて、すでに死んだ人たちからの引き継がなければならないという仕事をしているからですよ。私たちは伝えることにおいては、ある意味で生まれてきた時、死ぬという運命を背負って、死ぬことにおいて自分が生きたことを伝えることはできるかもしれないませんが、私たちが生きている時間はそれだけではない。生まれてきたこと、生きていることにおいて、自分が生まれてくる前に生きてきた人たち、先立って死んでいった人たちの人生を受け取らなければならないという仕事、同時にあるからです。その仕事を片方できながら生きていく時に、自分自身の人生が本当の意味で人間として生まれてきた意味を持ったものに変わると僕は思います。

皆さんもそうです。一生懸命生きて、一生懸命迷って、苦しむことは今は辛いかもしれないませんが、死ぬ時には次の世代に引き継ぐもの、閻魔様の前に持つていくものになっていくでしょうし、どのような人生を送られても、死ぬ時において差があるとは思いませんが、ただ自分が生まれてきた、生きてきたことにおいて、今、生きている

ことを意味づけるものとしては、自分に先立ったものの人生を引き継いでいくという仕事を意識しなければ、その人生はこの生きている人生の時間が虚しいものになってしまう。時間を過ごしていることの虚しさの根源に触れるようなものかもしれないませんが、時間を生きるとは虚しいことです。

私が死んで、あなたたちが亡くなった後に人生を引き継いでいく、未来に渡していくのだという話は話としてはできませんが、実際にそうなたかどうかは確かめる術がない。人間は悲しいけれども、聞いても本当にそうかどうかは確かめてみないとわからない。死んでみないと、そんなことはわからんわけです。死んでみないとわからんことを当てにして生きていくほど、人間はそれほどには素直ではないんですね。人間は素直ではない、ものを考えたり、自分自身のはからいを持って、いろんなことを見ていくことによって、死んだ時にそういうことがあると言っても、そのことを頼りにして生きていけるほど素直な存在ではないわけです。素直な存在でない私たちが、自分が死んで引き継いでいくことを意識しながら生きていくためには大変な努力がいる。それはいつもいつも死ぬことを思い描きながら、死んだ時に、自分は何であろう

人間の仕事

かということを考えながら生きていかなければならない。そういう大変な仕事です。それを私たちは、毎日意識しながら生きていくということには耐えられない。時にはそういうことを忘れて、今という時間を一生懸命生きたいと思うのが私たちでありますし、死ぬことを考えながら今を考えていけるほど、人間の精神は素直でも、強さも持っていないということです。

その時に自分自身の死を通して、人間の仕事ということを考えていくことでは人間は満たされない。そこに残されていく虚しさを超えていくものは何か。自分より先に亡くなった人たちの残していったものをいかに私たちは引き継ぐかという、残されたものを渡すということは、残されたものを私たちは受け取っている、受け取ったものを確認していくという、もう一つの仕事に気づかなければ、自分自身の人生の虚しさを埋めることはできない。死んだ人の思いを引き受ける以外に、人間は人間としての仕事をなし遂げることはできないということですが、あなたたちも今元気におられますが、さまざまな形で先に亡くなった人たちはいたということは事実です。同じ年代であっても病気で先に死んでいった人、身内に亡くなられた方がいなくても、一緒にい

て事故でなくなる人、そういう人も含めて自分が生き残っていることは、それと同時に一緒に生きてきた人たちが、その時間の中で次々と死んでいった歴史を背負っているということですよ。死んでいった歴史を背負いながら私は今、生きているということ、死んでいった人たちの思いを引き継ぐことによって、私たちは人間としての仕事として引き受けることによって、自分の人生を虚しいものではないというものに変えることができる。

それは不思議なことです。皆さんは幸せな人生、充実した人生、自分のしたいこと、自分の夢を実現すること、自分の能力を伸ばすことが自分の人生を豊かにして自分の人生を実のあるものにすると聞いてこられたかもしれませんが、人間は自分のしたいことをしても、自分の能力を発揮しても何も得るものはないんですね。その時の喜びがあっても、それはその時で終わりです。人間は自分のために生きているのではないんですよ。若くても歳をとっていても皆、同じことでしょうが、人間の仕事という時、人間ということと、自分ということの区別をして、自分は自分のために生きているかもしれません、自分という存在は人間であることであって、自分のために生きてい

人間の仕事

るわけではない。人のために生きているということが人間ということです。

若い人は自分の愛する人のために生きていると言えるかもしれない。人のためにと言っても愛する人のためにと思っている。愛することの根源を見ていくと、愛することとはそこにいる人を認めるということ。そこにいる人のために自分は生きている。その人のために生きている。横にいる人のために生きてはいかれません。横にいる人はその人のために生きる存在ということではないです。横にいる人は一緒に生きている時間を同じくしている人ですが、その人のために生きているということではない。たとえ仲がよくても本当に愛する人がいても、その人のために自分の命を犠牲にしても、その人のためにならんのです。

—自分のため、人のため

不思議なことに、人のために生きると言いながら、人のために生きるということは、その人の命の代わりに生きることができるか。そうではない。自分を犠牲にしてその人のために生きたとしても、その人のためにはならない。自分が命を犠牲にして尽く

されたとしても自分が幸せを感じることはできない。人のためと言っても決して、今、一緒に生きている人のためではない。それは先に死んでいった人のためであるし、自分が死んだ後、生きている人のために生きるんです。そういう意味では一緒に生きていても、やがてはどちらかが先に死ぬということですから、やがて死んでいく人のためにということはあるかもしれませんが、自分より先に死んでいった人のために生きるというのが人間にとって本当にしたいことなんです。あなたたちもいろんなことを経験していけば、次第にはつきりしてくることでしょうけど、自分のために生きているわけではないんです。自分のためであれば、人生なんか早くやめてしまっても別にどういうことはない。長さでもない、やっていることでもない。その人の価値なんて、人生の長さでも、能力でも、やった仕事でもない。生きていることそのものが一人ひとりの人生ですから、どういう生き方をしようが、どういう死に方をしようが、そのことにおいて差はありません。自分自身のために生きているものであれば、ですよ。

ところがその人生が自分のためではないものであれば、人のために生きるというこ

人間の仕事

とであれば、与えられた時間を人のために生きていくことによって、別の形で人生に、今まで自分たちが見ていた人生でないものを見た時に、その人生が自分に与えるものは全く違ったものになる。そしてその時に自分が生きていくというのは、本当はそういうことであつたのか。人のためにと言いましたが、人のためにこそ自分は生きていたんだ、それは死んだもののためにこそ生きています。それを亡くなった人を「弔う」と言います。弔うというのは訪れるという意味でもありますが、死んだ人に対して、その人を意識しながら、その人といつも語り合う。死んだ人を意識しながら死んだ人の思いを心の中に刻み続けること、それが人間の仕事の、私たちが具体的に生きていく中で、なさねばならぬことではなからうかと思うんです。あなたたちにとっても死んでいった人というのは少なからずいるはずですよ。不幸にして事故で友だちをなくす場合もある、病気でなくす場合もあるでしょう。肉親をなくす場合もある。極端な場合は自分が殺してしまう場合もあるかもしれない。でも殺すという形をとつたとしても、死んでいった命をもう一度、自分が引き受けていくことでしか、人間の仕事をなすことはできんということです。

そういう仕事を自分自身の仕事として意識し始めた時、人生の仕事の意味が変わってまいります。それは生きている限り、自分の人生を通して死んでいった人の人生を、自分の人生を通して証明していく。自分だけの人生は限られています。やれる時間も限られているかもしれませんが、そういう思いを持って生きていくことによって、死んだ人全部が違った形で「生きた」ということの意味をこの世界に残すことができるということなのです。私たちが生まれたということは、仕事をするということによって、さまざまなものを残したいという願望があるでしょうが、残されたものはどこに残るのかということなのです。それは私たちが生きる姿の中に残っている。自分の生きる姿を通して、そこに残されていったものが、自分の心の中だけに起こったのかということでしょうが、そうではないんです。それは人間の仕事として自分が死んだ人の命を引き受けて生きてきた人たちの姿を見ればわかることですが、その人の姿が一人あることによって、その周りに広がる世界が変わるということです。人間の仕事として、そういう死んでいった人たちの思いを引き継ぐ人が一人現れると、その人によって世界が救われるということです。

人間の仕事

それは自分の思いがどうこうではなく、そういう生き方をしている人が一人いることによつて、人間のすばらしさが世界の中に広がっていくということです。もつと言えば、そういう人が一人いるから世界は輝くんです。花が美しく見えるのも、山が美しく輝くのも、美しい世界が広がるのは、そういう人が一人いるから輝くんです。そういう形で世界というものを輝かしていく存在になるということ、それは自分で輝かそうとしてもそうはいかんかもしれません、その人がそのような生き方をしたことによつて世界が輝いてきたということです。そういう人たちの歴史が人間の歴史として続いてきたことによつて、人間が生きてきた世界はさまざま問題を抱えているでしょうけど、それにもかかわらず、命のすばらしさを輝かせている世界になってきているというのが、ある意味で仏教が、ここは真宗の教えを中心とされていると思いますが、仏教が浄土という、この世界にあつて命の輝く世界というものを「もう一つの世界」として見いだしてきたし、見いだしてきた浄土を見いださせるものになったものが、亡くなった人の命を引き受けてきた人の姿です。

―つながり

皆さんにとって、自分の人生がそういう人たちの思いを引き受けて生きることによって、自分自身の人生の意味だけではなく、自分が生きたことによって自分を生み出した世界が輝くんだということを自覚して感じてもらえるようになってきたら、自分の生きている姿がどのようなものであっても、自分が生きていることの尊さが知られると思えます。生きて生きて、苦しんで、さまざまな悩みに悩むかもしれませんが、その時間を一生懸命生きていることが自分を通して世界を輝かす仕事をするんだということです。そのために生きている。そのために私たちは生まれてきたんだということです。そういう仕事として人間の仕事がある。人間の仕事はただ生きて、次のものに渡すというだけではなく、先に死んでいった人たちの人生を引き受けて、そのことによって自分自身の一つの核となって世界を輝かせるという仕事を人間はするんだという自覚を持って、人間の仕事の上に一人ひとりの日常的な活動が、もう一回とらえ直されたら、そこに別の人生が見えてくるはずですよ。

人間の仕事

残されている時間はそう長くはありません、皆さんにとっても、僕にとっても長くはない。もう一〇〇年もないですね。一〇〇年は長いと思うかもしれない。でも一〇〇年というのはアツという間です。一〇年、二〇年がアツという間であるのと同じように、これから残された時間は短い。短い時間をかけて自分の人生の中に、亡くなっていた人の思いをどこまで引き受けて生きられるか、そういうことが問われているんです。そのことによつて、人が人ということではなく「人間」という存在に変わる。人間というのは人の間と書きますが、人と人との間で、私とあなたの間だと思う。私とあなたの間以上に、私と亡くなつていった人、私と次に来る人たちとの間、そこに存在するのも人間なんです。

私が死んで次に来る人との間にあるもの。あなたたちにとつては、これから家庭を持たれて、一緒に生きていくという意味の子どもではない。あなたたちが亡くなった後、生きていかなければならない子どもです。自分の子どもではなくても、私たちが死んでいった後、次の時代を生きていかなければならない子どもです。その子どもたちとの間に、本当の意味での人間という存在を感じるためには、私たちが、私たちが

生まれてくる前の時代に生きた人との間を感じなければならない。そこに人間がある。人間はただ単に一緒に生きていただけではない。つながり続けて生きている。つながりは横につながっていくだけではない。時間を超えて、昔から今、今から明日という形で時間を超えてつながっているのが人間だからです。

たとえ人間がこのまま滅びていったとしても、その最後の一人になるまでつながり続けているのが人間です。人間という種族がいつまで続くかということとはわかりませんが、やがては地球は滅びるのと同じように人間も滅びていくんでしようが、最後の一人になるまでつながっていくことが人間ということの意味です。つながっていくことにおいて、人間が滅びきるまで人間は人間という存在を全うしたということにおいて、人間の存在を生み出したことによって、命というものが世界に現れたということと、命を刻むことは、もっと大きな命の仕事です。人間の仕事ということと同時に命の仕事ということがあります。命の仕事は命の世界が現れたことを知る仕事です。

そこにさまざまな思いがある。人間の感情なんて、一人ひとりの心の中にあって、決して物質的に伝わるものではないと思われているかもしれませんが、そうでもない。

人間の仕事

人間の心によって表現されたものが、形となって残っていくことがあります。それは古代の遺跡に残された形に人間の心、そこに生きた人たちの思いが刻まれたことよって、命をそこに感ずる、私たちがそれを感じるということでも明らかです。一人ひとりの人が生きたということが刻まれていく。それは生き方の中に刻まれる。人間は大きなものを残していくという刻み方もありますが、生き方の中に、社会の中に刻んでいくということです。人間の歴史というものが始まって、今、私たちはここにいます。どこに刻まれたか。命を持っていること、人間であることによって私たちは一人ひとりが本当に自由にありたい、本当に平等にありたいという思いを持っているという自覚を持ち始めたということです。

自由とか平等は最初から自由であり、平等だと思っています。何の不思議もなく受け入れられているでしょうけど、自由、平等はこんな形で素直にわかる社会になってくるためには、人間の長い長い歴史が必要だった。人間を生み出してきた命の歴史が必要だったということです。自由ということも本当の意味で自由はまだまだわからない。女性は男性と平等になったと思っておられる方もいるかもしれませんが、実際は

全く平等ではない。女性は未だ平等でも自由な関係でもないんです。それを平等だと自由だと思っているのは本当の自由や平等がまだわからないからです。でも自由だ、平等と思えるのは以前の状態で比べて少し自由な状態に近づいたから、平等な状態に近づいたから、そう思えるようになった。それを求めてきたからこそ、自由であり、平等であるということを私たちは知っているわけです。自由は何かと言われてもわからない。「あなたの自由にしなさい」と言われてもどうしていいかわからない。「授業はなくなりましたから自由にしてください」と言われても自由にすることがどういうことかわからない。時間がただフリーにあることが自由か。そうではない。自由であることがよくわからない。自由ということを十分にわからなくても、私たちは了解できるようになってきた。それを自由だと伝えてきたのは人間というのが生まれて、命が人間という形をとって、これだけの時間をつないできたからです。大昔の人に自由といってもわからないかもしれない。権力を持っている人が、人を自由に動かすことが自由だと考えたかもしれない。一人ひとりが本当の意味で自由という時、相手のことをどうこうするのが自由だと誤解する場合もある。「私の自由でしょ」と言っ

人間の仕事

て自分勝手にすることが自由だと誤解する場合もあるが、それが自由ではない。一人ひとり同じように自由が与えられている。そのことにおいて平等でもある。自由と平等が矛盾しない形であることを、私たちは人間の歴史の中で刻まれてきているから知っているんです。

いろんなことはそう簡単にわかるわけではない。あたりまえに感じていることはそう簡単にわかるわけではない。命が輝くという命そのものが何かわからない。輝くということも何かわからなくても、命が輝くと聞いた時、そういうことだと私たちがわかるような感覚を持ち合わせていることは、それを長い長い歴史をかけて人々が伝えてきたことによって、私たちがわかるようになってきました。仏教の教えで「無量寿」とか「無量光」とか、そういうものがわかると思っていますが、それはわかった人たちがいたということと、誰にでもわかるということとは別です。お釈迦様が無量なる命、無量なる光という形でおっしゃったことが、私たちが命の輝き、命は永遠であると感じた時、そのことが具体的に思い浮かばなくても、そうだと受け止めることができるとするなら、それまでに生きてきた人たちがつないできた、死んでいった人た

ちの思いを引き継いできた歴史があるからです。それを引き受けてきた人たちは、真宗で言えばお念仏ということでお念仏をしてきた人たちの歴史の中に見てきたということです。他の宗教であれば、その宗教的な信心、信仰によって生きてきた人の姿を伝えてきたということです。

—引き継がれるべきもの

生きるということは決して自分だけのために生きているのではなく、死んでいったもののために生きることによって、世界というものに別の輝きを与える。その輝きが世代を超えて伝えられていくことによって、私たち一人ひとりの中に輝きが確実に伝わってきているということです。そうでなければ、私たちの人間の歴史というものは虚しいものになる。何をやっても戦争が続き、どんなにものが豊かになっても貧困が続き、たくさんのものが溢れていても片方で飢えている人が続くという、この世界は不幸な世界です。だけどそれにもかかわらず、人間が歴史を重ねることによって、人間の中に自由と平等、命の輝きがはつきりと人々の中に伝えられてきたとすれば、そ

人間の仕事

れは人間の歴史が伝えた、もう一つのすばらしい側面、それをなしたのが人間の仕事です。

私たちはその人間の仕事を自分自身、私の仕事ということではなくて、亡くなった人から引き継いできた、私が亡くなって次の世代に引き継いでいく仕事として自覚して、自分の人生の中心に据え直さなければならぬのではないかと思っっているんです。それは子どもで病気で亡くなった人たちを見ながら思ったことでもありますし、今、病気で苦しんでいる人々を見ながら考えたことでもありますけど、何より自分自身の人生がこのまま終わってしまうということに自覚した時、虚しく終わってしまうと感じた時、にもかかわらず自分が生きていくことの意味はどこにあるのか。今、日本で自殺する方は三万人を超えています。すごい数です。子どもの時に自殺する人もいますし、大人になって自殺する人もいます。歳をとってから自殺する人もいますが、亡くなっていく人たちが、なぜ死ななければならぬか。自分の仕事のことだけ、自分のために生きるということには生きる意味がないと気づかれたからです。死ぬのがあたりまえといえばあたりまえ。子どもであろうと大人であろうと、自分のためにだけ生き

ている人生は生きていく意味がほとんどないということです。でも死ぬことができない、死ねないで生き残っているのは何か。私の中に自分のためではない、もう一つのしなければならぬ仕事があるからなんです。そのことが、それを意識する、しないにかかわらず、自分を生かしている。何かいいことはないか、楽しいことはないかと探している。面白いこと、いいこと、楽しいことでもないかもしれないけど、本当の意味で自分がしなければならぬこと、やらなければならぬことを見つけた時、そのことが、「ああ、これだったのか」とわかる。自分のために生きるのではなく、死んだ人のために生きていくんだ。自分は死んで次の世代のために残すものを自分の人生をかけて明らかにするために生きていくんだという思いに至った時、生きていくということが違った意味を持って、生き続けることができるようになっていくんです。

皆さんは若いから死ぬことを考えたことがない方もいるかもしれないし、若いからこそ自分の死を考えている方もいらっしゃるかもしれない。いずれにしても、ここに生きておられることは、自分の中に生きなければならぬ、しなければならぬことがあることを十分に自覚できなくても、持っているから生きています。そのこと

人間の仕事

をはっきりと知って、これからの人生を生きていくことができれば、中途で自分の命を終わらせる方法は選ばない形になるのではないかと僕は思うんです。自殺することは悪いこととは思いません。自分で自分の命を絶つことも人間が自分というものを見つけて自分というものはっきりと知った時、そこに自分が生きる意味がないと見いだすのは、真実だろうと思うんです。だけどそれを超えて、それでも生き続けていくことの意味は別にあるということに気づいてもらえたら、途中で人生を終わらせることより、もっと自分が生まれたことを、ある意味で自分においてではなく、人間として証明することができるのではないかと思うんです。自分が自分の人生を証明するのはなく、人間として証明していくんです。私は人間に生まれたんだということを、自分の人生をかけて証明していく。これが本当の仕事、人間にとっての仕事だと僕は思います。そのことを皆さんに今日、お話して、聞いていただいた上で、いつか自分の人生というものが一体何であるかということを考えた時、もう一度人間としての仕事は何であったのかということを考え直すきっかけにしてほしいとお話しています。

三帰依文は「人身受け難し」という言葉から始まりますね。人間の姿を得ることは難しい。人間の姿を得たことがすべての始まりです。始まりというのは他の動物の形で生まれてくることもあったかもしれないですが、生まれないこともあったかもしれない。だけど人間の姿を持ったことによって、自分という意識を持ったものが、人間という一人の存在ではなく、命のつながりを生きるものとして生きざるをえなくなつたという自覚なんです。あなたたちが人生を終わる時に必ず出会うであろう自分自身の死と自分の後に残っていくだろう関係において、自分の人生が本当にこれでよかったと言いつけるような人生を送っていたらと思う。一期一会と言いますが、私がお話をして、聞いていただいて、皆さんに何かを伝えるとするならば、自分が死ぬ時において、自分は生きてきてよかった、そして今、死んでいくことをもって自分の人生を終わることを、これで人間の仕事は終わりだという形で、自分の人生に幕を引くような生き方をしていたらと思ってお話をしています。

どんな生き方をしたって構いません。仕事はどんな仕事をしたって構いません。そこに人間の仕事ということをお忘れしないで、人間の仕事ということを意識しながら日々

人間の仕事

の生活の中に自分というものを、もう一度問い直し続けていただいたら、おそらくどんな時にあっても途中で命を終わらせるという方法は選ばなくなると思うんです。僕は自殺はそれほど悪いと思っていませんが、でも自分で命を終わらせることは残されたものにとつては辛いことです。それはそういう命を引き受けることがなかなか難しいからです。その人が途中で終わったことを見なければならぬ、そういう形で引き受けていく時は、引き受けていく者が自分で命を絶った思いも引き受けなければならぬということによって、人間の力を超えたものになってしまう。自ら命を絶った人の死を引き受けるのは普通に亡くなったこと以上に、私たちにとってはすごく重い仕事として引き受けざるをえないものになってしまうからです。

―軽やかな死

自分が死ぬ時に重い仕事を残さないということも大事です。自分の生きたことを次の世代に伝えると言いましたが、いろんな亡くなり方があります。伝えるものが重い仕事にならないように伝えていくのも、もう一つの私たちの仕事です。引き受けるこ

とと同時に、伝えることは重い仕事にしないことです。重い仕事にしてしまうと、それを引き受けることができないか、その仕事に引っ張られてしまう。私たちが先に死んだ人の思いを引き受けるといっても、無念な思いで死んだ人の思いを引き受けると、自分の人生を、亡くなった人の思いを遂げるために生きることになってしまいます。亡くなった人のために生きるとは、亡くなった人の思いを生きることではありません。亡くなった人の思いを生きるというのは、その人に代わって生きることです。そういうことは自分の人生を台無しにすることです。思いを引き受けることと、その人に代わって生きるとは別です。残る思いが重ければ重いほど、それを引き受けることよりも、その人の思いを代わって生きるものになってしまう。死んだ人の思いを引き継ぐということと同時に、自分の思いを引き継げるような形で自分の人生を終わるということなのです。

自分の人生が重くならないように、軽やかな人生として終わるように。どんなに自分のやりたいことができなくて、無念の人生で、思うようにならない人生であっても、軽やかに死んでいくことが、もう一つ大きな仕事です。軽やかに死ぬこと。なかなか

人間の仕事

死ぬ時に軽やかにはいきませんが。そういう死に方をした人はいらつしやいます。死ぬ時にさまざまな思いを持ちながら軽やかに死んでいくのはどうしたらいいか。笑いながら死んでいくことではありません。笑うことが軽やかではありません。笑って死んだから思いが軽くなるわけではない。本当に軽くなるためにどういう死ぬ方をするのがいいかを考える。軽く死ぬというけど、そのためには清らかに死ななければなりません。清らかに死ぬことはどういうことか。花が枯れるように死ななければなりません。花が散って土になるように死ななければなりません。これは大変な仕事です。人間として生まれて完成する人は少ないと思います。そういうことを意識しながら、清らかに死んでいって、なるべく軽やかに死んでいく。そのためには自分の人生の中で人間の仕事をやり遂げていかなければ、軽やかにならんのです。「こんな人がいたな」と皆が振り返って、死んだ人の姿を思い返すことによって気持ちも軽くなって、皆が逝ったことを悲しむことが、残った人たちを元気にするような死に方があるんです。亡くなった人を思い返すたびに、残った人が元気になっていく死に方がある。そういう軽やかな死に方が、本当の意味での人間の仕事を完成した姿です。

閻魔様にとっていく絵を描いたという画家の話。ああそうかと。そうだったんだなと思うことと同時に、その人の絵を見た時、自分で引き受ける必要がないという軽やかさになる。これは閻魔様に持っていっただんだという。私の人生は私の人生として、自分で持っていくものは持っていく、軽やかに。そして残っているものを伝えていく。花が咲いた事実は事実ですが、残すものは花びらが土になって、その土を残すんです。私たちは何を残すのか。自分の人生を残すのですが、人生は自分を残すのではなく、次のものたちが生きていくための土になって残っている。そういうことを軽やかな死として考えてもらったらと思います。死んでいく時、死んでいった人の死を軽やかにすることもあります。自分が死ぬ時に軽やかであることは、死んでいく人を送っていく時に、その人に対してその人の死を軽やかにして送ることでもある。

―悲しみのすすめ

死んでいく別れは悲しいです、そう軽やかではない。送る時に悲しみの中にあっても、決して人を暗くするわけではなく、悲しみが人を清らかにする送り方がある。そ

人間の仕事

れは悲しみの中で、涙で送ることなんです。本当の意味で泣き続けることができれば、悲しみは軽くなります。これは覚えておいていただきたい。清らかにする、軽やかにするという方法はどこにあるか。皆さんもしつかり泣いた方がいい。泣き続けることによって、泣くのを我慢するのではなく、しつかり泣くことによって、悲しみの中に自分をもう一度返すことによって、不思議なことに生きる力が蘇ってきます。十分に泣くこと、十分に悲しむことが人間にとっては大事なことです。軽やかに死ぬことも十分に悲しめるような死に方をすることなんです。十分に悲しめることは難しいことなんです。十分に悲しむ前にいろんな思いが混ざってきて、悲しみの前に怒りとか欲が出てくる。でも悲しみだけになっていくような別れをする。皆さんがこれから生きていく中で、どんな時にあっても辛い時にはしつかり悲しみは悲しみとして自覚すること。悲しみの中で涙をしつかり流すこと。それが人間を、もう一度そこから元気にさせ、自分の人生を始めていく力になるんです。人間に与えられた不思議な力です。

悲しみは仏教では「悲^ひ」といいます。悲しみという心はどこにあるか。自分が悲し

むのではない。人と人との間に現れる感情が悲しいんです。自分が悲しいと思っています。寂しいかもしれない、辛いかもしれない。そういう感情は自分の中にありますが、そこには悲しいという感情はないんです。悲しみの感情は自分と人との間にある感情だから。うれしいのは自分がうれしい。楽しいのも自分が楽しい。悲しいは自分の心だけではなんのです。人がいて初めて、人との間にあるものが悲しみです。自分の気持ちの中だけで起こっているのは悲しい気持ちではない。本当の悲しみは自分と人との間にある気持ちなんです。悲しい気持ちが現れた時、自分と人との間に本当の意味での人と人との間にある存在としての人間を、もう一度思いおこすから元気になる。自分のためではなく、あなたのために生きていたということを思い返すから。だから泣くことで元気になる。自分のために泣いて悔し涙を流すんじゃないですよ。悲しみの涙を流すことによって人間を思い起こして、そこからもう一度生きる力を呼び起こすから、悲しみの持つている力は強いんです。

仏教では悲しみを最も大事な心として「大悲」という。人間の心ではない、人間の心を超えたところにある、人と人との間にある働きとしての心だからです。そのこと

人間の仕事

を皆さん、忘れないで、このことだけは忘れないで。人間は悲しまなければならぬ。悲しみを失ってはならない。悲しみ続けることの中に人間を蘇らせる力がある。悲しみというものが人と人の間にあつて、人と人とを結んでいく絆となるんだということを、忘れないでいただきたい。自分が死ぬ時、自分の人生を支えているものは何かという時、自分というものではなくて、自分を超えた人間ということ、人間を支えているものは私に先立つ、死んでいった人であり、自分が死んで次の世代に生きる人たちであること。そして今、悲しみによって見いだされてくる、あなたという存在だということに気づいていただければ、それだけで十分です。そのことが勉強していく上でも、仕事をしていく上でも、家庭を持っていく上でも、さまざまな人生を送っていく上でも、そのことを忘れないでいることが、人間として輝くということを証明していくものになるだろうと思ふんです。

おわりに

人間はそんな捨てたものではありません。人間のやっていることはひどいことばかりですが、人間そのものは捨てたものではない。人間そのものすばらしさ、輝きを一人ひとりが証明するところに、そこに始まる新しい世界が必ずあるはずです。それまでに人間が先に滅んでしまうかもしれない。にもかかわらず人間に生まれたことを喜んで、人間として生きていかなければならないんです。皆さん若いし、身に即した話として聴くことはできないかもしれませんが、やがて皆さんも病気をすることもあるし、自分の知っている人をなくすこともある。自分が死に瀕することもあるかもしれない。災害が襲ってきて命を失うかもしれない。それでも生まれてきて生きていることはすばらしいということを思い出していただきたいと思います。これで終わります。

—二〇〇四年一月二八日—